

## 意見書

菅原 啓太

### 1. 渴望

あなたには、人生が変わるほどの悔しさを感じた瞬間がありますか。はるか遠くを歩く誰かに、抑えきれない憧れを感じた瞬間がありますか。私にはあります。

2009年の初め、一人の女性と出会いました。海外から父を訪ねてきた友人の娘さんで、当時アメリカに留学中でした。食事が始まると間もなく、彼女は流暢な英語で私に話しかけてきました。「あなたは今何をやっているの？今後どうなりたいの？目標は？」矢継ぎ早に質問が飛んできます。そして彼女は、質問するだけではありませんでした。自分はこうありたいという考えを、母国語でもない英語で、恥ずかしがることなく、迷うことなく話し続けたのです。その姿を間近にして、私は焦りを感じました。いや、焦りというより、悔しさでした。同年代の人間が、自分の言葉で世界と渡り合っている。翻って私は、何も言えずにいる。その場にいることすら、恥ずかしかった。このギャップから生まれた感情が、行動を起こすことに躊躇しがちだった私を、生まれて初めて自らの意志で、留学へと押し出したのです。

留学先のボストンでも、一つの出会いに救われました。当初は寮生活でしたが、せっかくアメリカの古都ボストンで過ごすなら、もっとまちの中で生きたい。そう願って、アパート探しに飛び込みました。ところが短期留学生に部屋を貸してくれる先は見つからず、異国の地で一人、先の見えない不安の中にいた私に、一人の留学生が手を差し伸べてくれました。彼女は自らのコミュニティを動かし、帰国予定の仲間と家主をつなぎ、私の住まいを整えてくれたのです。あの食卓で私を留学へと押し出したあの方と、同郷の人でした。国境を越えて人とつながれば、人生はここまで豊かになる。完璧でなくても、一歩踏み出せば誰かが応えてくれる。

そして2015年、私は青年会議所へ入会しました。東日本大震災から4年。地元仙台では復興への歩みが続く中、まちの再建とともに様々な課題も浮かび上がっていました。正直に言います。私はJCが嫌いでした。震災後の重い空気の中で、地域の未来を語る場であるはずなのに、私のいた場では、前向きな言葉よりも諦めや否定の言葉のほうが強く聞こえていました。何かを変えようとする声が、実現の難しさの前で消えていく。理想が、現実の壁に阻まれていく。そんな日々の中で、いつの間にか私自身も、何も言わない人間になっていきました。

苛立ちと悔しさを感じながら過ごす日々の中で、しかし時折、地域の未来を前向きに語る人に出会いました。その瞬間、胸の奥に眠っていた何かが目を覚ます感覚がありました。「もっとこうあったら良いのに」という理想への憧れ。そしてその理想と現実のギャップへの悔しさ。あの食卓で感じたあの感情と、同じ構造をしていました。あの食卓もボスト

ンも、そして青年会議所での日々も。振り返れば、私を動かしてきたのは、いつもこの構造の繰り返しでした。自分よりはるかに遠くを歩く人間や景色に出会い、そのギャップに悔しさと憧れを感じ、気がつけば動き出している。その感情に、私はいつからか名前をつけるようになりました。

渴望、と。

渴望とは、現状への悔しさと理想への憧れが交差する瞬間に生まれる、行動へのエネルギーです。理性ではなく、感情の深いところから湧き上がってくる、抑えることのできない衝動。私はこの渴望こそが、人を動かす唯一の原動力だと信じています。どれほど制度を整え、仕組みを作っても、人の心が動かなければ、社会は変わりません。人を動かし、社会を変えるのは、いつも、一人の人間の内に灯る感情です。そして今、この渴望を持つ人間が日本の地域に育つかどうか、私たちの国の未来を決すると確信しています。

## 2. 渴望格差

その確信は、一人のタクシードライバーとの対話から生まれました。2023年、JCI基金委員長として、ルーマニアの首都ブカレストを訪れました。かつての建築物と近代化されたまち並みが共存する美しい都市でした。移動のため呼んだタクシーに、私と同世代のドライバーが現れました。彼は気さくにこのまちのことを語ってくれました。国会議事堂の前を通ったとき、彼はこう言いました。

「あの建物は、チャウシェスクの時代に建てられたものです。中で使われているものはすべて、当時のルーマニア産です」そして彼は続けました。「私の両親はチャウシェスクの時代を生きました。あんな時代には戻りたくないと言います。でも私は、その時代を生きてはいないけれど、今よりも良かったと思ってしまうことがあります。あの時代は、食料も、衣料も、住まいも、旅行に行けば交通も宿も、最低限必要なものはすべて与えられた。今は豊かになり、品質の高いものが溢れている。でも私は、欲しいものが買えない」私はその言葉を聞いた瞬間、胸に重いものが落ちてきました。彼は、諦めた人間ではありません。むしろ、その逆でした。目の前には、品質の高いものが溢れている。欲しいものは、いくらでもある。もっと良い暮らしをしたいという渴望は、誰よりも強かった。ただ、そのどれにも、自らの手では届かない。そして、彼の渴望が向かう先は、自らの手で未来をひらくことではなく、すべてを与えられた過去へと向いていました。彼自身が生きてもいない、両親の時代へ。

なぜ、彼の渴望は、そちらへ向かってしまったのか。彼のまわりに、自らの手で豊かさを生み出している人間の姿が、見当たらなかったからです。外から流入する豊かさの中で、地元の人々の労働は外資の利益となって域外へ流れ、自ら稼ぎ、自ら地域に還元する主体が育っていない。彼が「もっと良い暮らしを」と渴望したとき、それを託せる現実の姿が、与えられた過去のほかに、なかったのです。渴望は、誰の中にもあります。問題は、その渴望が、「自らの手で未来をひらく」方向へ向かうか、それとも、「誰かに与えられるの

を待つ」方向へ流れるか。その分かれ目を決めるのは、自らの手で豊かさを生み出している人間が、その地域にいるかどうかです。だからこそ、地域に、自ら渴望し、自ら動く人間が育たなければならない。彼らが地域に根ざし、自ら稼ぎ、自ら地域に還元する。その姿こそが、次の誰かの渴望が向かう先を照らす光になります。渴望する人間が地域に育ち、地域が自らの力で立つ。それが、そこに生きる一人ひとりの手に、本当の豊かさを届ける道です。

これは、ルーマニアだけの話ではありません。歩んできた歴史も、社会の成り立ちも違う今の日本でも、同じことが起きています。渴望の火種が消えたわけではありません。日本の若者には、国や社会の役に立ちたいという気持ちが、確かにあります。ところが、自分の行動で社会を変えられると思う若者は、その気持ちを大きく下回り、世界の主要な国々の中でも、最も少ない。役に立ちたいと願いながら、自らの手で変えられるとは思えずにいる。火種はあるのに、それが炎になっていないのです。なぜでしょうか。自らの手で動いて、何かを変えた。その手応えを持てる人が、少なくなっているからです。自ら動いて地域を良くしている大人の姿が、身近に見えない。だから、渴望が湧いても、それを自らの手でひらく方向へ向けられず、誰かが変えてくれるのを待つか、どうせ変わらないと諦めるほかない。

では、自ら渴望し、自ら動く人間は、どうすれば育つのでしょうか。その答えを、私は自分の歩みの中に見ます。私を動かしたのは、いつも、火種が炎に変わる一度の体験でした。あの食卓にいたのは、自らの意志で海を渡った人でした。ボストンで手を差し伸べてくれたのも、自ら動いて生きる人でした。目の前に、自ら動く人がいた。動き出した私に、誰かが応えてくれた。その手応えが、私の火種を、炎に変えてくれたのです。しかし、その私でさえ、青年会議所に入った頃、諦めの言葉に囲まれる中で、いつしか何も言わない人間になっていました。火種が炎になるかどうかは、その人の強さで決まるわけではありません。手応えを得られる場に、立てたかどうか。

火種そのものは、誰の中にもあります。問われているのは、火種の数ではありません。その火種を、自ら動く渴望に変えられるかどうかです。何が、それを分けるのか。一度でも、自ら動いたことで何かが応えた。その手応えを持つ人は、次の火種も炎に変えられます。完璧でなくても、一歩踏み出せば誰かが応えてくれる。その手応えが、自分を変えられるという感覚を育てるからです。逆に、動いても何も変わらず、悔しさが諦めに沈んできた人は、火種が疼いても、自ら火を消してしまう。

この、火種を炎に変えられるかどうかの差を、私は渴望格差と呼びます。それは、単なる体験の差ではありません。体験の機会をどれだけ持てたかという量の問題ではなく、その一度の体験が、火種を炎に変える手応えになったかどうかという、質の問題です。炎を起こせないまま来た人は、自ら何かを生み出そうとする力を、少しずつ失っていく。

ならば、私たちのすべきことは明らかです。最初の一度、その火を共につけること。一度でも自らの手で炎を起こせた人は、もう、自分で火をつけられるようになるからです。

火をつけて終わりではありません。ついた火が、自らの地域を良くする方向へ向かうように、共に歩むこと。ブカレストのドライバーの渴望が過去へ向かったのは、渴望そのものが間違っていたからではありません。その向かう先を照らす人が、地域にいなかったからです。だからこそ、火を共につけた私たち自身が、自ら動く姿をもって、その火の向かう先を照らし続けるのです。自ら渴望し、自ら動く人間が地域に育てば、地域は、外から与えられるのを待つのではなく、自らの力で立つようになります。渴望する人間が、地域を変える。渴望する地域が、日本を変えるのです。

渴望格差を是正するために、何が必要なのでしょうか。多くの人は「体験の場を増やせばいい」と言います。しかしそれだけでは足りません。それを是正する仕組みを設計できる人間が、今の日本にどれだけいるのか。この設計者は、一朝一夕には育ちません。人の中の火種を見抜き、その火を共につけ、その火の向かう先を照らし、炎を起こせる場や関係を作れる人間だけが、設計者になれる。今の日本では、渴望格差があるがゆえに、そのような設計者が育つ土壌そのものが失われています。渴望格差は設計者不足を生み、設計者不足が渴望格差の固定化を招く。この悪循環を断ち切らなければなりません。

戦後の焼け野原から歩みを始めた日本の青年会議所は、そもそも渴望を活動エネルギーの源泉とした組織です。先人たちの渴望が、今の日本を創りました。しかし、渴望さえあれば現実が動くのかというと、そう単純ではありません。渴望が向かうのは、まだ来ない未来です。理想を遠くに描くだけでは、現実は一ミリも動かない。先人たちは、渴望と同時に、目の前の一瞬に全力を尽くしていました。過去にとらわれず、未来を夢見るだけでなく、今この一瞬を一生懸命生きる。この感覚を、私は渴望と並ぶもう一つの指針としてきました。現在は過去の積み重ねの上であり、未来は今の積み重ねの先にあります。今この瞬間の私たちの行動が、十年後・二十年後の日本を創るのです。渴望が未来を描く。今が現実を動かす。この二つが揃ったとき、人は本物の一步を踏み出します。

渴望格差の是正とは、火種が炎に変わる体験を、一人でも多くの人に届けることにほかなりません。ただ、私たちの手だけで、すべての火を共につけることはできません。私たちが取り組むべきことは二つです。一つは、渴望格差是正の設計者を育てること。もう一つは、火種が炎に変わる体験を実装したモデルを社会に広げること。この両輪が揃ったとき、渴望格差の悪循環が好循環へと転じます。

渴望する青年が集まり、渴望する地域を創り、渴望する日本を創ってきた遺伝子を受け継ぐ私たち青年会議所こそが、この両輪を動かせる唯一の組織です。渴望が生まれる社会は、挑戦できる社会です。渴望する地域は、自立できる地域です。渴望する日本は、世界の中で真に価値ある国として繁栄し続ける日本です。渴望があればこそ、地域は、日本は、いつでも生き返るのです。

### 3. 渴望格差是正の設計者を育てる

渴望は、あらゆる課題を解決する万能の答えではありません。日本が抱える課題には、それぞれに複雑な背景があります。渴望というものの見方に立つとき、別々に見えていた課題の奥に、共通する一つの根が見えてきます。人が、自らの手で未来をひらく力を、取り戻せるかどうか。私はこの視点から、日本の課題に向き合います。渴望格差是正の両輪の一つは、その仕組みを設計する人間を育てることです。

日本では、生まれてくる子どもの数が減り続けています。少子化の背景には、雇用や所得、住まいや子育ての環境など、様々な要因が絡み合っています。その一つひとつに向き合う取り組みは重要であり、私たちも共に考え続けなければなりません。その上で、一つの問いを立てたいと思います。生まれる人の数をいかに増やすかと同じくらい、生まれた一人ひとりが、渴望を持って豊かに生きられるかどうか、力を注ぐべきではないでしょうか。渴望格差の是正は、少子化を解決する処方箋ではありません。生まれてくる一人ひとりの人生を、自らの手でひらけるものにする。その視点は、人口という数の議論だけでは届かない、この課題のもう一つの本質を照らします。生まれてくる一人ひとりが、自らの渴望に火をつけられる社会を作ること。それが、私たちの問いへの答えです。

渴望格差を是正する仕組みは、誰かが設計しなければ生まれません。その設計者とは、どのような人間なのでしょう。それは、人の中に眠る火種を見抜き、最初の一度、その火を共につけられる人間です。一人の力ではありません。教育・経済・地域・防災・安全保障といった複数の分野を横断し、自ら多様な体験を積み重ね、人が炎を起こせる場や関係を設計し、火の向かう先を照らせる人間です。子どもの頃に渴望の芽を引き出され、若者として社会課題と向き合い、地域の危機に自ら備え、国家の未来を自分ごととして考える。その連鎖の中から、設計者は育ちます。この連鎖を日本全国に広げるための仕組みを、私たちは創造しなければなりません。

### 4. 渴望を生む環境を、地域に実装する

両輪のもう一つは、渴望が生まれる環境そのものを社会に実装することです。設計者を育てるだけでは、渴望は生まれません。育った設計者が動く現場、渴望が日々の暮らしの中で生まれ続ける環境を、地域に組み込まなければなりません。そのために、私たちは渴望を生む環境が実装されたモデル地域を作り出します。各地域の実情に合わせた取り組みを重ね、そこで得られた知見を全国へと広げていく。一つのモデルが他の地域に広がり、やがて全国に渴望を生む地域が点在していく。その出発点を作ります。

火種が目覚ますきっかけは、日々の暮らしの中に潜んでいます。予期せぬ出会い、想定外の体験、偶然の衝撃。心が動いても、小さく動いてみる場がなければ、火は炎にならないまま消えていきます。今の日本では、子どもが心を動かされ、自ら一步を踏み出し、確かな手応えを得られる場が、あまりにも限られています。大切なのは、その手応えを積

み重ねられる環境を、日常の中に用意することです。人が根ざしたいと思えるまちを作ること。それが地域の未来を変えます。意欲ある人がそこに集い、子どもたちがそこで育ち、新たな挑戦が生まれていく。この連鎖を全国に広げることが、地域の自立につながるのです。だからこそ私たちは、地域そのものを、渴望を生むまちへと変えることを目指します。渴望を生むまちを設計できる人間が育つかどうか。地域そのものを設計できる人間が地域に根ざすかどうか。そこに、地域の未来がかかっています。

## 5. 渴望を生む仕組みを、世界へ届ける

設計者を育て、モデルとなるまちを作る。その両輪を、日本国内に閉じることなく、世界の地域へと広げていきます。渴望格差は、日本だけの問題ではありません。世界を歩けば見えてきます。外から流入する資本に依存し、その果実が国外へと流れ出ていく地域。気候の激変に翻弄され、水や食料の不足に直面する地域。ブカレストのタクシードライバーが語った嘆きは、姿を変えながら、地球規模で繰り返されています。気候変動はもはや環境問題ではなく社会不安の問題となり、貧困は所得の問題ではなく希望の問題となり、AIの登場は新しい格差を生む。それでも、世界には渴望する若者が確かに存在しています。国境を越えて社会課題に立ち向かい、自らの地域に渴望を持ち帰ろうとする若者が、必ずどこかにいる。世界に散らばるその渴望を、いかにつなぎ、いかに増幅し、いかに世界の構造そのものを変える力に育てるか。私たちに、その役割を果たす責任があります。

自然災害と隣り合わせに生きてきた歴史。世界に類を見ない速度で進む超高齢社会。地方の過疎。少子化。これらは課題であると同時に、私たち日本人が向き合い、知恵を積み重ね、地域で実装してきた答えの素材でもあります。課題先進国であるということは、解決先進国になりうるということです。日本の地域に積み上げられてきた知恵は、世界各地がこれから直面する課題への、まだ世に出ていない答えの宝庫です。私たちが世界に届けるべきは、完成された答えではありません。私たちが運ぶのは「種」です。日本の地域に流れてきた自ら整え、自ら創り、自ら地域に還元するという生き方の種を、世界各地の渴望ある若者に届け、その地域の文脈で育ててもらおう。渴望は与える側と受け取る側を固定しません。渴望と渴望が交わるすべての場所で、新しい渴望が生まれていくのです。

## 6. 渴望する組織を作る

渴望格差を是正する仕組みを設計する。渴望を生む環境を地域に実装する。渴望を生む仕組みを世界へ届ける。私たちは、この大きな三つの運動を動かそうとしています。これだけの運動を動かすには、それを担う器が要ります。では、これを担う組織はどこにあるのか。世界を見渡しても、この役割を担える組織は他にありません。1949年、戦後の焼け野原に立った先人たちが「新日本の再建は我々青年の仕事である」という覚悟のもと、日本の青年会議所を立ち上げました。何もなかった日本に対する、抑えきれない渴望が、こ

の組織を生んだのです。私たち青年会議所は、生まれた瞬間から、渴望をエネルギーとする組織でした。地域に根ざした青年経済人として、地域の現場に立つ。全国の会員ネットワーク。JCI を通じてつながる世界。単年度制という新陳代謝が、常に若い渴望を組織の核に据え続ける。これらすべてを兼ね備える組織が、他にあるでしょうか。

JC しかありません。渴望格差を是正する設計者を育てるのも、渴望を生むまちを作るのも、その仕組みを世界に届けるのも、すべて JC にしか果たせない役割です。これは自負ではなく事実です。私たちは、渴望格差是正の唯一無二の組織として、この時代に存在しているのです。この事実を、私たち自身が深く自覚し、誇りに変えなければなりません。組織への誇りは、メンバー一人ひとりの渴望の源泉になります。「自分が所属する組織は、日本の未来そのものを担っているのだ」という確信があるからこそ、人は渴望を持って動けます。誇りなくして渴望なし。だからこそ私は、この一年、その誇りを全国のメンバー一人ひとりに届け続けます。

## 7. おわりに

すべては、一つの問いから始まりました。あなたには、人生が変わるほどの悔しさを感じた瞬間がありますか、と。あの食卓で出会った一人の女性。私の人生を動かしてきたのは、いつも、自分よりはるか遠くを歩く誰かとの出会いでした。そのギャップに感じた悔しさと憧れ。それが、私の渴望の源泉でした。ブカレストで言葉を交わしたタクシードライバーは、その渴望の向かう先を照らす人間が、地域に育たなければならないことを、私に教えてくれました。渴望は、人を動かす唯一の原動力です。現状への悔しさと理想への憧れが交差する瞬間に、理性ではなく感情の深いところから湧き上がる、抑えることのできない衝動。この渴望を持つ人間が地域に育つかどうか、私たちの国の未来を決めます。設計者を育て、環境を地域に実装し、仕組みを世界に届け、組織を強くする。そのすべては、一人でも多くの人間が渴望を持って生きられる日本を創るためです。

渴望するだけでは、人は動けません。渴望は、ともすれば人を焦らせます。理想と現実のギャップが大きいほど渴望は強くなり、その強さは時に「まだ足りない」「もっと先へ」という終わりのない飢餓感に変わります。遠い未来ばかりを見て、足元の今を見失う。あるいは過去の後悔に縛られて、一歩も動けなくなる。扱い方を誤れば、人を消耗させる力にもなるのです。渴望を支えるのは、今この一瞬に全身で立つという生き方です。渴望が、時間の先にある理想へと心に向ける力だとすれば、今を生きる力は、足元の一瞬に立ち返らせる力です。遠い理想に焦られる渴望も、この力と結ばれたとき、初めて確かな一歩になる。先人たちの渴望が今の日本を創ったように、今この瞬間の私たちの行動が、十年後・二十年後の日本を創るのです。未来は、いつか来るものではありません。今の積み重ねの先に、必ず来るものです。

渴望が未来を描く。今が現実を動かす。この二つが揃ったとき、人は本物の一歩を踏み

出します。渴望なき行動は、ただの作業です。今を生きる力なき渴望は、ただの空想です。渴望と今が結ばれたときにだけ、未来を変える力が生まれます。

私には、信じて疑わない未来があります。地域の経済を動かす人。地域の課題を解決する人。地域の子どもたちの心に、最初の火をつける人。地域の未来を描き、自ら動く人。私は、そういう人たちのことを、地域のリーダーと呼びます。

地域のリーダーは、JC で育つ。この言葉が、私たちの国の常識になっている未来です。そして、その常識は、待っていて訪れるものではありません。私たちが、地域のリーダーを育て続けることで、初めて現実になります。そういうリーダーの姿を思い浮かべたとき、誰もが自然に「あの人も JC で育ったんだ」と思う。それが当たり前になっている社会。渴望する人間が地域に育ち、その渴望が JC で磨かれ、地域に還っていく。その循環が、日本中で当たり前になっている未来です。渴望が地域を生き返らせる。その光景こそが、私たちが歩んできた道の、何よりの証明となります。そのために、私たちは今、動くのです。

渴望する人間が、地域を変える。渴望する地域が、日本を変える。渴望があればこそ、地域は、日本は、いつでも生き返るのです。その渴望を現実に変えるのは、遠い未来ではなく、今この一瞬の、あなたの一歩です。渴望せよ。そして今、動け。